

第四章 光の河Ⅱ

1

『まもなく12番線に、6時46分発のぞみ一〇四号、東京行きが参ります』

JR京都駅。早朝。

アナウンスが新幹線の接近を告げ、タケルの緊張はますます高まった。背中とリュックの間を冷たい汗が流れ落ちる。ポケットからチケットを取り出してホームの行先表示と見比べるのはもう何回目だろう。乗りまちがえて博多に行ってしまったらどうしよう。そんな心配がタケルをつかんで離さない。

落ち着け。タケルは目を閉じて自分自身に囁きかけた。まずは東京に出て、そこで乗り換えて、米沢よねざわに行くんだ。他のことは考えるな。集中するんだ。集中——。

『まもなくドアが閉まります』

ハッとして目を開けた。タケルが乗る予定の新幹線はすでに到着し、いままさに発車しようとしてるじゃないか。タケルはあわててドアに飛び込んだ。その直後にドアは閉まり、車体は静かに駅を滑り出した。汗が全身から吹き出していた。

雨が窓に水滴の線を描いている。どんよりした空が、

近づく台風の猛威を先触れていた。

タケルが米沢行きを決めたのは昨夜だった。あれ以後も新出博士^{にいで}から連絡は来なかった。タケルの不安はもはやちきれんばかりに大きくなり、我慢の限界を通り越した。なんとかしなくちゃいけない。何をしたらいいんだ。

これまでのタケルなら布団をかぶって、ただ不安の影が行き過ぎるのを待ただけだったろう。でも昨夜うたた寝している最中に見た夢は、タケルの中の何かに火をつけていた。

——猿人たちに混じって、肉親や仲間をいじめる敵に真っ向から戦いを挑んだ、ぼく。

それを思い出すと、体の奥底から熱いものが込み上げてきた。自分が動かないと何も変わらないし、何も良くならないんだ。そんな気持ち^{こぶ}が信念のようにタケルを鼓舞^{こぶ}したのだ。

ただ惜しいのは、夢がクライマックスで終わってしまったこと。大男さんが持ってきた木ぎれをつかみ、さあ来いブラウン族どもーと吠^ほえかったとたん、

「冷麺できたわよー」

祖母ちゃんの柔らかい声がタケルの夢を強制終了させてしまった。いらない！ と叫びたいぐらい残念だった

が、冷麺の誘惑には勝てなかった。

しかし以前見た夢の続編を見られるなんて……タケルはそれだけで満足することにした。

2

食後、自室に戻ったタケルは、すでに米沢行きを決意していた。「自分みたいな子供が行ってどうなる」という考えがサツと心をかすめたが、気にしないことにした。そうと決めたら次は計画だ。まず言えるのは、この行動は秘密だということ。目的地が以前住んでいた米沢だといっても、訪ねる相手が行方不明なのだ。祖父ちゃんが許してくれるはずがない。話せば、まず向こうの警察に問い合わせよう、警察の人に研究所の様子を見に行ってもらおうと言うだろう。でも祖父ちゃんは知らない。博士と警察の仲が悪いことを。

以前、博士が近所の住民から激しく苦情を申し立てられたとき、^{あいだ}間に入った警察に対して博士は「間違ったことは何もしとらん」と強く主張し、警察のやり方に強く抗議した。それが印象を悪くしたのだ。^{なだ}宥めに来た警察署長にさえ住民の前でひどく問い詰めて、赤っ恥をかかせたんだから。その署長さん、博士をひどく毛嫌いしているという噂だ。

だから誰にも頼れない。自分の目で確かめる。

——しかし米沢は、遠い。タケルは物心ついてこのかた、山形県を出たことがなかったのだ。春の引越しのときでさえ、運送屋の車の助手席でボーっと外を眺めていただけだった。どんな道を走ったのかさえ憶えてない。それ以前には帰省したこともなく、いつも祖父ちゃん祖母ちゃんのほうが米沢に訪ねてきてくれた。だから新幹線にも飛行機にも乗った経験、いや記憶がない。

タケルはインターネットで交通手段を調べてみた。その結果、鉄道も飛行機も所要時間にそれほど違いはないが、飛行機の方が片道一万円高いことがわかった。タケルは思いだした。食事中に見ていたTVニュースで、大型台風が接近しているため、明日、飛行機は欠航の可能性があると云ってたことを。それなら鉄道に決まりだ。でも鉄道だってわからない。影響が出る前に動かないと。京都から米沢までの新幹線の運賃は二万円少した。でも内訳にある「乗車券」はいいとして「特別料金」ってなんだ？

机の上のゴジラ型貯金箱のフタを開けた。小銭を含めて三万円弱。片道分しかないじゃないか。うーん。タケルは弱気になった。やっぱり無理なのか。子供には無茶な計画なのかな……。

とにかく行くだけ行こう。向こうでバイトして帰りの

費用を稼ごう。やったことはないけど……。そうと決まれば、もう考えないことにした。明日は早い。祖父ちゃんらが起きる前に出発だ。

3

初めてのひとり旅。決行当日の朝は風に揺れる雨戸の音で目が覚めた。午前五時。家の中は静かだ。タケルはリュックを背負って足音をたてずに階段を下り、家の外へ出た。雨はひどくない。タケルは頭からすっぽりレインコートをかぶると、自転車にまたがった。

駅前の駐輪場に自転車を預けて、切符を買う。ここは私鉄の駅だからまずは京都までだ。始発の乗客は少ない。こんなガラ空きは初めてだな。

京都駅に到着し、行き先表示を見ながら、どうにかＪＲ駅に着いた。新幹線切符の買い方については素直に、教えてくださいと駅員に尋ねた。駅員は微笑みながら「みどりの窓口」を教えてくれた。「特急料金」の意味も説明してくれた。

無事に『のぞみ一〇四号』に乗れたタケルは、雨に濡れる扉の窓を眺めながら、ホッと息をついた。なんだ、新幹線に乗るのって簡単だ。

タケルは切符に書かれた番号を照らしながら、自分の座席を探した。帰省ラッシュが始まったせいか、車内は少くない乗客がいた。それでも指定した席は窓側だったので安心した。

座席につくと眠気がやってきた。さすがに朝が早過ぎたんだ。タケルはウトウトし始めた。

「ここだわ、ここここ」

ニワトリが近づいてきたのかと思った。目を上げると祖母ちゃんぐらいの年齢の女性が満面の笑みでタケルの視界に入ってきた。

「あああ、乗れてよかったわあ。走って汗かいちゃった。ボクう、おとなりにお邪魔するわね」

そう言うなりドスンと腰を落とした。タケルの体が数センチ浮いた。おばさんはハンドバッグから扇子を取り出してバタバタとあおぎ始めた。

「クーラーが効いてて助かるわあ。こんな早い時間に乗るってのに、うちの家族ったら全然協力してくれないんだから、やんなっちゃう」

どうやらタケルに話しかけているらしい。

「ああ暑い暑い。ねえボクうおひとり？　こんな朝早くひとりで東京へ？　偉いわねえ。お母さんはご一緒しなかったの？　お父さ——」

「すみません」タケルは頭を下げた。「静かに置いといて」

てもらえませんか？」

その瞬間、タケルの目は信じられないものを見た。笑
いじわの顔が一転、鬼と化したのだ。お婆さんは検札に
来た車掌の前に立ちふさがった。

「他^{ほか}の席に換えてちょうだい。いますぐ！」

金切り声をあげたお婆さんは車掌さんを摘^{つま}むように押
しながら、隣の車両へと消えていった。

4

タケルは呆気にとられたまま、家来のように車掌さん
を従えたお婆さんの消えた扉を見つめていた。どうやら
気分を悪くさせてしまったらしい。それは理解できたが、
あんなに顔の形相が変わるものだろうかと驚いたまま
だった。まるで水が魔法で一瞬のうちにお湯に変わった
ような。今は、知らない人と気軽に会話する気分じゃな
かったので丁重に断ったつもりなのに…。

タケルにとってお婆さんが氣に入らなかった点がひと
つだけあった。それはタケルを「ボク」と呼んだことだ。
タケルの身長は同年齢の平均よりかなり低い。顔つきも
幼く見られがちだ。これまで「ボク」と声をかけられた
ことは何度もある。でも好きじゃないのだ。うまく説明
できないけれど、なんとなく幼い子供のように扱われて

る気分になるから。

新出博士は違った。忍び込んだ研究室で見つかったとき、博士の第一声は「君は名前を何という？」だった。そう「キミ」なのだ。その時タケルは博士を「同類」だと感じた。そしてふたりは年齢の離れた親友になった。タケルは気づいていないが、父のいないタケルにとって、博士は父親であり兄貴のような存在なのかもしれない。そんな博士が行方不明、音信不通——。なんとか無事でいてほしい——タケルは強く念じた。

窓の外を流れていく小さな町の風景が、タケルに、米沢に住んでいた頃を思い出させた。

タケルの家があったのは米沢市でも端っこのほう、田舎というほどではないが、古い町だった。

タケルの父、武彦^{たけひこ}は銀行員だった。職業柄、転勤が多く、若い頃はどちらかというと旅行気分で、自ら進んで転勤を楽しんでいたとタケルに話したことがある。そして京都の支店に着任したとき、母、由里子^{ゆりこ}と出会ったのである。ふたりはすぐに恋に落ちた。そしてまもなく武彦が転勤することになったとき、由里子は迷わず武彦に付いていくことにした。ふたりは急遽、結婚式を挙げた。媒酌人は入社以来、武彦に目を掛けていた神奈川の支店長、波多野^{はたの}守^{まもる}だった。ふたりが新居を構えたのは、武彦

の転勤先である米沢だった。武彦は課長に昇進した。それは同じ支店に移ってきた波多野の計らいによるものであり、彼は、将来を見込んだ武彦を手元に引き寄せたのだった。

米沢は波多野の故郷だった。彼の家は代々この地方の名士であり実力者だった。波多野御殿といえど町のどこからでも見える「城」であり、その威容はつねに周囲の家々を睥睨^{へいげい}していた。

5

タケルの生まれた米沢の小さな町は、山や川や池など自然があふれていた。幼少の頃からタケルはその中を駆けめぐって遊んだ。ちよつとした崖から転げ落ち、手足を擦りむくことは日常茶飯事だったし、魚を追いかけて深みにはまり、濡れねずみになったことも二度や三度ではなかった。そんなとき、困った顔をする実の親以上に取り乱すのが友達の親で、なぜ危ないところに連れて行ったかと自分の子の頭を小突いて叱るのだった。タケルが、ぼくが誘ったのだと説明しても友達の親たちはペコペコ頭を下げて笑うばかりだった。「タケルさんとおのおかげでワシら生活できとるんやぞ」と聞こえよがしに言う親もいた。当時はその言葉の意味が理解できな

かった。

タケルの家は大きかった。見晴らしのよい高台にあり、土地は周囲の家の六軒分はあったろう。部屋の数も三人の家族が住むだけにしては多すぎた。後にタケルは知つたのだが、土地は父の武彦の上司、波多野支店長の一族所有であつたのを、家は波多野の息のかかった建築事務所が設計したものを、父の転勤祝いと称して波多野が贈つたのだつた。しかし父はそれを潔いさぎよしとせず、月々返済する約束を取り付けて購入した。直属の上司ゆえ身分不相応であると無下に断ることもできなかった。「本当はもつと可愛い家がよかつたねえ」とこぼすのをタケルはよく耳にした。返済のため、栄転したとはいえ家計は苦しく、タケルが乳離れするのを待つて、母の由里子も父の銀行に事務員として働きに出ることになつたのだつた。

タケルはひとりぼっちになった。幼なじみ達は長じるにつれて媚こびた目を向けるようになり、それがたまらなく嫌だつたので一緒に遊ぶこともなくなった。父は県のさまざまな開発計画に携わっているらしく、毎日東へ西へと飛び回り、帰宅は午前零時を回ることも少なくなかつた。母は母で「もつと稼いどかなくちゃね」と残業を重ねた。だからタケルの食事は通いの家政婦が作つて、ひとりで食べた。タケルの生活からは遊び相手がいない

なり、畢竟、家に閉じこもることが増えた。

そんなときタケルを慰めたのは本だった。それは文章のたぐいではなく、父の書齋にある画集や写真集であった。武彦は旅行が好きだったし、転勤先でもその土地の景色を撮っては自ら写真集などを拵こしらえていた。タケルは学校から帰ると書齋に直行し、それらを飽きずに眺めた。土日も接待で家にいない父、毎日の疲れでダウンしている母はどこへ連れて行ってもくれず、タケルはただ写真を見ながら、空想の中で遊ぶしかなかった。

6

それでもタケルは毎日の生活に、さほど不満はなかった。どこの家も同じだと思っていたのだ。

タケルが九歳の時、久しぶりに家族三人で出かけたことがあった。それは波多野支店長の末娘の結婚披露宴に出席するため、父にとっては仕事のひとつだった。会場の波多野御殿は、本物の城のように積み上げられた階層を持つ建築で、後ろを屏風のように急峻な山々に囲まれ、折からの陽差しに燦然と輝き、町を平らげんとする鯨のように見えた。タケルは身震いした。

披露宴は御殿の中の大座敷で行われた。その広さに驚いたのはタケルだけではなかっただろう。小学校の体育

館がゆうに二つは入りそうだ。出席者は多士済々で、地元のTV局まで取材に来ていた。挨拶に立った何人もの地元の有力者たちは、結婚する新郎新婦のこと以上に、口をそろえて波多野家の栄光を讃えた。波多野家と姻戚関係にある某国會議員などは、その長広舌の中で、何人もの議員を輩出してきた波多野家と、父の銀行とが一緒になって現在進めているダム開発を始めとする開発事業を、声高らかに何度も褒めそやした。

宴の最中、支店長や彼の父である県會議員をはじめ、波多野の人間が何人も紹介されたが、支店長自身の口から武彦が紹介された時には小さなどよめきが起きた。まるで波多野一族の一員かのような扱いである。周囲から羨望の眼差しが注がれて、母は得意気だったが、タケルは父を波多野に奪われたような気がして面白くなかった。いやそんなことよりもタケルを愕然とさせたのは、あらためて見た父の姿だった。こんなに痩せていたつけ。別人のようだ。若い時分から旅が好きで国内のめぼしい山は登ったぞと豪語していた体格のいい父はどこへいったのか。血色の悪い顔で周囲の人間に挨拶を繰り返す父。今になって気づいたタケル自身にも驚いていた。

その頃を境にして、より多忙になった父を、ようやくタケルは心配するようになった。いずれ父はあの鯨に飲

み込まれてしまうのではないか、知らない世界に連れ去られるのではないかと思うと気が気ではなくなった。しかし小さなタケルにできることは何もなかった。

ある日、家でひとり静かに写真集を眺めていたとき、付けっぱなしのTVからアナウンサーの声が聞こえてきた。

『山形県のダム建設および工場誘致に関する贈収賄事件が発覚しました。贈賄容疑で逮捕されたのは、大和武彦容疑者、三十六歳——』

7

通路を隔てた反対側の座席の男性が「うーん」と声を上げた。男性は顔を窓に押しつけてブツブツとつぶやいていた。「なんや富士山、裾しか見えへんやん」。

もう静岡だ。富士山は台風の影響で顔を隠しているようだ。タケルは時間を見ようと腕時計に顔を近づけた。京都を出てすぐ検札を受けた切符を握ったままだったことにようやく気づいた。

冷房が寒い。東京駅まであと1時間。

あの日も寒かった。クリスマスの直前だった。

「タイホ」という言葉は、ニュースやマンガの中でしか

使われない、一種の業界用語だとタケルは思っていた。

だから最初に耳にしたときの感想は「父さんがドラマに出演した」というトンチンカンなものだった。もちろん逮捕されたことはフィクションではなく、その後の日々でタケルはイヤというほど、肌で実感することになった。

当時はもう新出博士と知り合って数ヶ月が過ぎていた。その年、4年生に進級していたが、級友らにはヒネた者が増え、タケルに対して、今までの羨望の裏返しで、遠回しなイジメをする連中も出てきた。タケルは学校をサボりがちになった。しかし博士に出会ってさまざまなお話を教えてもらうようになり、サボりは減った。自覚のないまま、学ぶ面白さを知ったようだ。逆に級友らとは話が合わなくなってしまったが。

ニユースが終わるや、タケルは家を飛び出した。研究所の博士は肩で息するタケルに相変わらず飄々と応対してくれたが、タケルの尋常でない顔色の理由を聞き、ふだんは使わないTVを出してきて一緒にニユースをチェックしてくれた。理解できない部分は博士に質問し、ようやく事件の全体像がつかめた。大事件だとうやく悟った。

——父さんは、県が計画していたダムや工場の工事がうまくいくよう、政府のお偉いさんにたくさんのお金

を渡していたという。そのお金は銀行のもので、計画の大事な部分を任されていた父さんが、銀行のお金をこっそり持ち出してやったことだという。つまり、ワイロを送ったこと、そのお金を銀行から盗んだことの二重の罪だという。

TVには政治家や県知事らが相次いで登場し、みな事態を憂慮すると言いながらも、父武彦をひどく非難していた。なぜ父さんだけ？ ニュースの最後に波多野支店長が登場した。今度こそ父さんをかばってくれると期待していたタケルは、耳を疑うことになった。

8

「私をはじめ、銀行の者はすべて彼に全幅の信頼を寄せておったわけです。それを彼は裏切った。県民の皆様に対して申し訳なく思うと同時に、彼に対して大きな怒りを禁じ得ません。許すことができません。確かに金銭面で若干ルーズな部分があつたと聞きます——」

プツ。タケルはTVのスイッチを殴りつけるように切った。握られた拳は震え、まなざしは何も映っていない画面を睨めすえていた。

「なんで波多野さんまで——」

いつも父と一緒にいて「私と彼は一心同体だ」が口ぐ

せだつた支配人。家に来るたび、タケルに何がしかのプレゼントを忘れない、気の良いおじさん。父さんがピンチなら誰よりも頼りになるはずの人が……。何がルーズだ。強引に譲ろうとした土地だつてちゃんとお金払つてるじゃないか！

「タケル。お母さんのところへ行つてやれ」

博士に指摘されたタケルはハッと顔を上げた。母さんのことをすっかり忘れていた――。

「博士、ぼく帰ります」

「うむ。外はもう暗いから、送つてつてやろう」

帰路を早足で急ぐタケルに、博士はいつもの白衣姿のまま、ヒゲを風に靡かせ、付いていった。買い物帰りだろう、途中で級友の母親に出くわした。彼女はタケルに気づくと、肩を怒らせて行く手に立ちはだかった。しかし博士の眼光鋭い視線に臆したらしく、そそくさと姿を消した。

大和家の門灯は点いていなかった。

「タケル」博士は石段を上りかけたタケルに声をかけた。「お父さんは誰も裏切つとらんぞ」

ふだんはサンタのように、にこやかな博士が、顎を突き出すようにしてキツパリ言った。タケルは大きくうなずいて玄関のカギを開けて入った。

廊下の電灯を手探りで点け、タケルはキッチンに入っ

た。と、冷蔵庫の脇に母が倒れているのを発見した。

それからが大変だった。あわてて外へ飛び出し帰りかけていた博士に呼びかけ、博士が自宅から車を持ってくるや、母を乗せて病院へと走った。

幸い軽い貧血と診断されたが、一晚タケルは博士と共に母の病室に泊まることになった。

翌日になるとどこから嗅ぎつけたのか、もう報道陣が病室に押し寄せてきた。昨夜の連絡でこの日駆けつけた祖父と博士が協力して、裏口から母を自宅へと搬送した。母には安静が必要と医者は強く言った。しかしこの日、報道陣とは別な人間たちが、整然と押し寄せてきた。大和家が強制捜査を受けたのだ。

9

捜査員らはドカドカと家の中に踏み込み、タケルの目の前を無表情に通り過ぎた。そして父、武彦の書斎に入るや、本やファイルを手当たり次第に段ボール箱へと放り込み始めた。まるで祭りの露店が店仕舞いするかのように。

タケルが繰り返し読んだ旅行記も、痛んだり指紋で汚れたりしないよう注意して眺めた写真集や画集も、本棚から乱暴に引き出されては、ゴミのように積みまれていく

。 捜査は母の寝室にまで及ぼうとした。祖父との間で押し問答があり、静かに行うという約束で女性捜査員が中に入った。タケルは大切な本が消えていくのを見ていられず、母の寝室に待避していたのだが、眠る母のそばで他人がタンスや戸棚をまさぐる様子に、ただうつむいて嵐が過ぎ去るのをじっと待つしかなかった。

なぜこんな仕打ちを受けなければいけないんだろう。父さんは本当にそんなひどいことをしたのだろうか。わからない。大人の世界のことは全然わからない。わからないけど、何かの間違いだと思いたい。博士は「裏切つとらん」と言ってくれた。あの父さんが、ぼくや母さんをこんなに苦しめるようなことをするはずがない。

最近、父さんと話したのはいつだったろうか。この数ヶ月、いや一年ぐらいはまともに会話をしたことがない。たまに見るのは疲れた顔ばかり。逆に昔撮った写真集の中の、若くて元気な父さんの姿ばかりが瞼に浮かんでくる。

小さい頃は旅先であつた話をよくしてくれた。「タケル、旅に教えられた一番大きなことはな、人間は他人に親切にしたい生き物だということなんだ」。そんな時の父さんはとてもうれしそうな顔をした。「いろんな場所を見て回るうちに、その土地の人はどんな歴史の上に生

きてるんだろうと思うようになったんだよ」。そう言っ
ては各地の伝説や神話などを面白おかしく話してくれた。
タケルの名前も最初は「大和武尊」にしたかったとい
う。「やまとたけるのみこと」だ。これにはさすがの母
さんも反対した。「ぶそん」と呼ばれるって。いいじゃ
ないか、与謝蕪村の俳句は君も好きだったじゃないかと
わけのわからない話になり、最後は「武」に落ち着いた
という。

タケルの顔に笑みが浮かんだ。家族団欒の思い出は古
いものばかりだ。それだけに純化され、現実逃避へと容
易に誘う。タケルは母のベッドの脇で、膝を抱えて宙を
見つめたまま微笑み続けた。

周囲ではガサゴソという静かな喧噪が、いつ果てると
もなく続いていた。

10

ガチャンとガラスの割れる音がして、タケルは回想の
世界から引き戻された。きよろきよろ見回すと女性捜査
員らは手を休めて耳をそばだてている。誰かが叫んだ。

「二階の子供部屋だ」

開いたドア越しに、警官数人が階段を上っていくのが
見えた。タケルはおもむろに立ち上がり、母の部屋を出

て階段をゆつくりと上っていった。登りきったところでドアの陰から覗くとタケルの部屋に警官らが集まって何か話していた。絨毯の上には割れた窓ガラスが散らばっており、その中に黒くていびつな石が転がっているのが見えた。外から投げ込まれたようだ。大事なものが壊れたりしなかったろうか。タケルは知らず知らず、部屋の真ん中まで入っていった。

「子供がいるぞー」

窓の外から怒声がした。割れたガラス越しに、広い庭が見える。他にも黒い石が点々と落ちていた。投げられたものの届かなかったのだろう。その向こうの植木の間から、家の周囲をたくさん人間が取り囲んでいるのが見えた。それは報道陣ではなく、近所の人々だった。彼らは大声で叫び出した。「出てこい」「謝れ」「町の恥さらし」という怒号に混じって「死ね」「殺せ」という穏やかではない文句も混じっていた。しかし連絡が回ったのか、表を警備していた警官がすぐに飛んできて、解散しろと命令した。それに対して人々は引かず、かえって警官相手に息巻く人たちもいた。騒ぎの中でまた石が投げられ、何枚かのガラスが割れた。タケルは動くことができず、ただ呆然としていたが、警官に抱きかかえられ、やっと階下に降りた。

騒ぎは暗くなってもおさまらず、警官隊が増員された。

雨戸のある窓は閉められ、出窓などは戸板で石の攻撃から守られた。

タケルはあれからずっと母の枕元で身を縮めて座っていた。なんで町の人たちはあんなことを。会うたび「賢そうな坊ちゃん」だの「立派なお父さんを持って」と眩しそうに声をかけてくれていた優しそうな人たちが…。

警備員らは夕方、たくさんの段ボール箱と共に帰っていった。父の書斎はみごとなくらい空っぽになっていた。夜になっても投石の音は止まなかった。姿が見えないのをいいことに調子に乗ってるんだと祖父は憤慨していた。

深夜、母が眠りから覚めた。タケルは声をかけた。しかし母の目は焦点が合っておらず、何を問いかけてもじっと天井を見つめるだけだった。

11

翌日、医者 of 往診を受けた母は心神耗弱しんしんこうじやくの疑いがあると診断された。急遽入院の必要があると告げられ、大きなサイレンを鳴らしながら玄関に乗り付けた救急車は母を乗せるや、朝から家の周りをたむろしていた主婦連をかき分け、再び大きなサイレンを鳴らしながら母を連れ去った。

タケルは祖父とタクシーで後を追った。出がけに浴びた主婦連の罵声にあてられ、さらに寝不足も重なって頭の芯が熱くジンジンしていた。

祖父が昨夜、徹夜で家の周囲を見回っていた警官から聞いた話だと、父が逮捕された当日、母はニュースを銀行で聞き、そのまま警察署に乗り込んだという。警官の制止も聞かずに大声で父を捜し回り、会わせることはできないと最後は外へ放り出されたという。又聞きしたタケルには信じられないほどの大立ち回りだった。

病院に到着したとき、すでに母は新しいお仕着せに着替えさせられ、個室で静かに眠っていた。

「タケル、父さんに会いに行くぞ」

受話器を置いた祖父がタケルに言った。警察から連絡があったのだ。面会できると。

あれから三日が過ぎていた。大晦日まであと数日というこの日、山形は大雪となった。もこもこのダウンジャケットを着たタケルと祖父は警察署に向かうべくタクシーに乗り込んだ。さすがに誰にも会わず、庭に投げ込まれた石やゴミなどは、白いベールの下に隠れていた。

父との面会は警察署の地下にある部屋で行われた。父はたった三日で見るも無惨に襲^{やっ}られていた。いやタケルが

最後に見た日からは一週間以上経っていた。こんなに髪が白かったろうか。

アクリルの衝立の向こうに着席するなり、父は深々と頭を下げた。

「お義父さん、すみません。お騒がせしてしまいました……」そしてタケルの顔をチラッと見ると「すまない、タケル」とまた頭を下げた。

祖父は最初の疑問をぶつけた。「どうして謝るのかね。まさかニュースで報道されてることは全部本当なのかね？」

「いえ——すみません、事件のことについては話せないことになってるんです」

「お父さん」タケルはカラカラに乾いた喉から必死で声を出した。「書斎の本、全部持ってかれたよ。写真集も、画集も——」そこまで喋った時、タケルの目から初めて涙が流れ落ちた。

「そうか……」父は苦しそうに顔をそむけた。

12

面会に与えられた時間は短かった。そのほとんどは、急を要する手続きや事務連絡の話に費やされ、タケルは祖父の隣に座って、ただ父の落ち着かない指先を見てい

るだけだった。

やがて立会人から終わりですと告げられ、ふたりは立ち上がった。父も大儀そうに腰を上げた。その時、父はつとタケルに視線を投げかけた。

「“光の河”を覚えてるか？」

「——うん」タケルは答えた。

「いい子だ……。父さんは“光の河”を歩いていくよ。だから安心して待ってなさい」

「——わかった」

父はタケルと祖父が部屋を出ていくまで見送っていた。ドアが閉まる直前、タケルには父が笑ったように見えた――。

警察署の玄関を出ると、急にお腹が鳴った。ふたりは表通りに出て、目に止まったファミレスに入って昼食をとった。祖父はお茶漬けだったが、タケルはしっかりとハンバーガーランチを食べた。

「父さんが言ってた“光の河”って何だい？」

祖父の問いにタケルは思い出しつつ説明した。

それは父が学生時代に、貧乏旅行でアフリカへ渡ったときの話だった。ある村から別の村に行こうとオンボロバスに乗り、途中で目的地らしい停留所で降りた。父は英語で何度も「ここでいいのか？」と運転手に問い質し

たのだが、わかっているのかいないのか運転手はイエスイエスと言うばかり。バスは走り去ってひとり残され、歩き出したが、どこまで行ってもデコボコの大地と藪しか目に入らない。村どころか人の姿も家もない。すでに陽はとつぷりと暮れ、動物の遠吠えさえ聞こえてくる始末。ヤバいと思ったもののどうしようもない。ええい今夜は野宿だ。そう諦めようとしたとき、まわりが明るくなった。なんだ？とビツクリしながら辺りを見回すと、視界の隅を光が飛び去っていった。もしやUFOかと消えた方向を見つめていると、また別の方向から光が現れた。それは流れ星だった。いくつもの流れ星が天空をヒューンと飛んでいくのだ。シャワーのように広がる流れかたではなく、細い川のようにあたかも進むべき方向を指し示すようだったという。父は再び荷物を担いで歩き出し、1時間後にようやく村に到着したのだという。その話を村ですると、このあたりの古い言い伝えに『正しい正しきものは光に導かれる』とあると教えられたという――。

「父さんは、間違ったことはしていない、そう伝えなかったんだな」祖父は言った。

父さんは「光の河」を歩いていく——。

カッコいい。なんてカッコいいんだ！

父さんは間違ったことなんか何もしていない。ぼくにそう伝えたかったんだ……。

「父さん、すぐに帰ってくるよね」タケルはうれしさに我慢できず、祖父に同意を求めた。

「そうだな……」祖父は冷めたお茶漬けにようやく箸を付けた。

雪は小康状態になった。

タクシーがつかまらなかつたので帰りはバスにした。

知った顔に会うかと不安だったが杞憂^{きゆう}だった。ふたりは一番後ろの座席に並んで座った。

タケルの目が何気なく見た車内広告に釘付けになった。

祖父も何事かとタケルの視線を追った。発売されたばかりの週刊誌の見出しだった。

《イケメン銀行課長、アキレた勇み足》

《県と銀行を手玉に取った選民課長^{エリート}の失速》

タケルにもそれが父のことであるとわかった。

その時、タケルの携帯が鳴った。警察からだった。いつものように祖父に代わってもらった。

「ゆ、由里子がですか——？」祖父は絶句した。

降りる停留所に着くと、タケルは駆け出した。雪が

ザッザッと後ろに飛び散った。

家の周りにはマスコミがまた数台の車を止めていた。近所の人の姿も見える。

TVカメラがタケルに寄ってきた。

「いま、大和容疑者の息子が帰ってきました。——ボクう、お話聞かせてくれるう？」

マイクを向けたニヤケ顔を『ぼくチャン野郎に用はない』とばかり無視して家に駆け込んだ。勢いづいて玄関にいた警官にぶつかつた。警官は無表情でタケルの肩をつかみ、後から走ってきた祖父に言った。「こちらです」

家の中から母の歌うような声がした。「うちの人はどこなの？ タケルはどこ？」

バスにかかつてきた電話は「由里子さんが病院を抜け出しました。ご自宅に向かったようです」という連絡だったのだ。

「ああタケル、いたのね、よかった。父さんと一緒だった？」

婦人警官に付き添われていた母はその手を振りほどき、タケルに駆け寄って抱きしめた。タケルの耳にも母の声色は普通じゃなかった。

「町の人が寄ってたかってひどいこと言うのよ。お前んところは泥棒だの、犯罪者だのって。私たちはこんなにリフ

ジンなハクガイに負けずに生きていきましようねえ」

14

病院を抜け出した母は、家の前で待ち受けていたマスコミや住民たちの心ない出迎えを受け、再び傷ついた。救急車が到着し、鎮静剤を打たれた母は再び病院へと移送されて行った。

タケルは知らなかったが、当時は他にめばしい事件がなかったこともあり『山形ダム疑獄』は各メディアを日々大々的に彩っていた。しかしながら関係する省庁や代議士らはうまく立ち回ってマスコミの攻撃を躲^{かわ}したため、人々の興味は父の銀行に、いきおい父武彦に集中した。なにより米沢市の中でも一等地に豪邸を構え、エリート、さらにはカメラ映^ばえするハンサムということで、格好のターゲットにされたのだ。銀行側は一切が武彦の独断でやったことであり、全く関知しないことであると逃げた。その後も預金者が県民であった場合は特別に金利を倍増するという“誠意”が通じたのか、一切合切が武彦のやったことであり、武彦は神をも恐れぬ犯罪者である^と決めつけられてしまった。もちろん武彦に対する嫉妬もあったろう。警察にもそんな印象や憶測が蔓延し、武彦の状況は楽観視できないものだった。

タケルが不憫な祖父は、何も教えなかった。

病院には祖父が付き添ったが、タケルは家にひとり残った。疲労が限界に来ていたのだ。

携帯が着信を知らせた。また良くない知らせかとしぶしぶ取り上げると、新出博士だった。

「よおい、タケル、家にいるならお邪魔するぞ」

玄関の戸を開けると、携帯で話しながらマスコミの間を威風堂々歩いてくる博士が見えた。両手に持った紙包みは食料でいっぱいだった。

「それにほら、クリスマスケーキだ」とテーブルに置かれたそれには、博士に似たサンタが砂糖菓子の天辺でふんぞり返っていた。そういえば今年はクリスマスどころじゃなく過ごしてしまった。博士はわざわざケーキ屋さんに作らせたんだ。

「ありがとう、博士」

「なに、いいってことよ。さあ一緒に食べよう」

「――ぼくあんまりお腹すいてないんだけど」

「何を言うか若者が。ケーキやお菓子は別腹べつばらというじゃないか。どんなときでも美味しいのがケーキだ。食べてみい」とタケルに勧めた。

「そうだ、ひとついいことを教えてやろう」

「なんですか？」

「別腹とべ、らばらは似とるが、ベルばらは『ベルサイユのばら』だ。じゃあ別腹は？」

「うーん、わかんない」

「別サイズの腹じゃ、わっははははは」

15

タケルと博士は夜が更けるまで語り合った。

このささやかなひとときは、タケルにとって忘れられないものになった。米沢時代を締めくくる最後の思い出として。

線香の煙が細長い布のように、暗い部屋の中をたなびいている。目の前には白い布をかぶった父が横たわっていた。

《武彦さんがお亡くなりになりました》

連絡を受けたのは朝まだ早い時間だった。

今朝方、病院から帰宅したばかりの祖父は、受話器を置くとタケルを起こして警察へ向かった。

「仕事で体を酷使していた上、逮捕されたことで心労が重なったでしょう」。医者の説明はたんたんとしていた。布をめくると、鼻筋の通った父の顔は今にも目を開き、笑いかけてくれそうだ。昨日、面会室で最後に見せ

てくれたように。

長年、波多野支店長に取られていた父をようやく取り戻せたと思ったのに、今度は永遠に奪われてしまった。

―― “光の河” は父さんをどこへ導いたの？

―― “光の河” は父さんを救えなかったの？

新幹線は東京駅に滑り込んだ。タケルはリュックを背負って立ち上がった。リュックの中には帽子とTシャツと下着が数枚、文庫本一冊、買い置きチョコレートが一枚入っているだけだ。

ホームに降りるとき、あのキレ屋の恐いおばさんに会わないよう十分気をつけた。

乗り継ぎ時間は三十分あった。ホームから乗客の姿が消えるまで待ち、ゆつくりと歩き出した。階段を下りて東北新幹線のホームへと向かう。

帰省するのだろう、何組かの家族連れを見かけた。タケルぐらいの年齢の男の子をはさんで父親と母親がベンチに座り、仲良くサンドイッチを食べている風景もあった。タケルはリュックから野球帽を取り出し、周りが見えないよう深々とかぶった。

父が亡くなって、タケルにはますます夢と現実の区別がつかなくなった。このまま米沢で暮らしていくのは無

理と判断した祖父は、タケルと母を実家に引き取ること
に決めた。

祖父は五年前まで京都の工業高専で教鞭をとっていた。
その祖父が難儀していると聞き、運送会社に勤める教え
子が、母の移送も含め、引越し作業を安価で快く引き
受けてくれた。

こうしてタケルは生まれ故郷を後にした。

16

東京発山形行き新幹線つばさ一〇七号は、9時36分発。
米沢までは2時間ほどだから午前中に到着してしまう。
意外に近い。一大旅行をイメージしていたのに拍子抜け
だ。タケルは待合室に座って、つばさの車体に走る緑の
ラインを見つめていた。

あと5分で発車だ。タケルは立ち上がって待合室を
出ようとした。そのとき見覚えのある影が階段を駆け
上がってきた。うわ、キレ屋のおばさんだ、こっちに來
る！ タケルはあわてて後ずさりし、自動ドアを閉じた。
おばさんは両手にお弁当とお茶を持って、目の前をちゃ
かちゃか通り過ぎ、つばさに乗り込んでいった。よかつ
た、違う車両だった。

出発の合図が響き渡ったのでタケルはあわてず乗り込

んだ。さあ今度降りるのはいいよ米沢だ。何にもいい想い出のない米沢だ。博士は別にして。

博士……どこにいるの……。

リュックが震えているの気がつき、昇降口のそばでリュックを背中から下ろして中を開いた。携帯のバイブが鳴っていたのだ。着信に「じいちゃん」と出ている。タケルは受話ボタンを押した。

「もしもし、祖父ちゃん」

「おお、タケル、心配しとったぞ。朝から何遍なんべんかけても通じへんし、書き置きに『米沢行きます』しか書いとらんし」

バイブモードにしたまま、リュックの底に放り込んでおいたから気づかなかったのだ。

「ごめんなさい。ぼくは大丈夫だよ。いま東京駅を出たところ」

「そうは言うてものう……おまえひとりで新幹線に乗れたんか？」

「うん、簡単だったよ」

「それやったらええけど……いや良よおない。急に家出したりして、祖母ばあちゃんも心配しとるぞ」

「——ごめんなさい」

「いや……もう謝らんでもええ——」

車窓を、雨に濡れた町の風景が流れていく。

「あのね、家出じゃないんだ。じつは――」

「博士か？」

「――どうして知ってるの？」タケルは咳き込むように尋ねた。

「さつき電話があったんや。なんやあわててたみたいやけど。携帯なくしたんで公衆電話からかけてる言うてたな。タケルの携帯番号覚えとらんし、心配してるかもしれないちゆうて、な」

博士は無事だったんだ！ タケルは安堵の溜息ためいきと共に、通路に座り込んだ。

17

「博士に言うゆといたぞ」祖父は続けた。「タケルがそちらに向かっています、て。そしたらエライ驚いてはったわ」

そうだった。安心するのはまだ早い。

「博士は、いまどこにいるって？」

「ちゃんと自宅の研究所にいるらしいで」

ホッ。なんだ、何も心配することないのか？

「そやけど『研究所……』て言いかけて切れてしもたわ。タケルの携帯番号、伝える暇もなかった」

小銭、用意してなかったのかな？

「——とりあえず博士には何もタケルの心配するような事はないみたいや。どないする？」

「どないするって？」

「米沢まで行かんと、帰ってきてもええんちゃうか、わざわざ、その……」

『イヤなことを思い出しに行くようなもの』は祖父ちゃんの口ぐせだ。祖母ちゃんが、お世話になった人だけでも御挨拶しとかんと、と言うたび、顔を真っ赤にして言うんだ——。

「うん。でもね、もう山形行きに乗っちゃった」

「そうかあ、もおそなとこまで行つとるんか」

「それに帰りの電車賃もないし……」

「な、なに」祖父ちゃん本気で仰天してるらしい。

「タケル、おまえ本を買いすぎや。あんなに貯金ある言うとつたのに……」

「ごめんなさい」

「ええい、どちらかにしろすぐには帰れんのやな。うーん……しゃあない、今夜は博士の所に泊まらせてもらいなさい。わしは今日どないしても外せん用事があるよつて、また夜にでも電話するわ。今度はちゃんと出なあかんで」

「わかった」祖父ちゃんは、ふだんは標準語を話すのに、興奮するとベタベタの関西弁に変わってしまうからおか

しい。

通話を終えたタケルは、リュックを持って立ち上がり、客車の中へ入っていった。乗客は座席の半分ぐらいの数がいた。タケルの席は東京までとは反対に、左側の窓側だ。ドカッと座り込んだら急に甘いものがほしくなった。リュックを開けてチョコレートを取り出し、銀紙を剥がすのももどかしくガブツと齧り付いた。

食べながら車窓の風景を眺める。少しずつ建物が減ってる。だんだん東京から離れてるんだなあ。

半分食べたチョコをしまい、文庫本を取り出した。自分の小遣いで買ったクラークの『幼年期の終わり』だ。難しい内容なのでまだ少ししか読んでない。タケルは安心した反動で読書に没頭した。

新幹線は大宮に着いた。

18

しとしとと垂れる雨粒が窓についたホコリを落としていく。本から顔を上げたタケルは、あの日、学校の駐車場で見た井沢美代子先生を思いだした。先生の眼からも雨粒が落ちていたように見えた。

ずいぶん前のことのように思うけど、まだ昨日のことなんだ。先生、どうしてるだろう――。

ヌツと雨粒に“眼”が生えた。タケルは髪の毛が逆立つほど驚いた。その眼がタケルをギョロリと睨むにらと「おい、この辺だぞ」と声をあげ、昇降口の方へと移動していった。

やがて“眼”の正体が車輛に乗り込んできた。

当然、妖怪ではなく人間だった。それでもタケルには妖怪であつた場合より何倍も驚いた。

「大男さん——」

そう、彼はあの夢に出てきた猿人の大男だったのだ。図体の大きさも顔かたちも瓜二つ。服を脱がせて前屈みにすれば一丁上がりだ。

「ああこの席だ。早く来いよ！」

人間の大男は通路を振り向いて声を上げた。連れがいるらしい。

「待ってくださいよお。荷物が引つかかつて」

連れ合いは何やら黒くて大きな箱を肩から提げている。それを人にぶつけては謝っている。

「こら、そんなに頭下げると、他の人に当たるだろうが……ああ、もう見てらんねえぜ」

大男はもたつく連れに構わず、ドカと座席に腰掛けた。通路をはさんでタケルと反対側だ。見つめていたタケルの眼が彼の眼と合った。あわててタケルは正面を向き、顔を伏せて本を読んでるフリをした。新幹線はすでに大

宮駅を発車している。

「タンクさーん、半分持つてくれたっていいじゃないスカー。危うく乗り遅れるとこだったしー」

連れがようやく大男の席までやってきた。まだハアハアと荒い息が治まらないようだ。

「おめえがアレもコレもつて、レンズをしこたま持つて来るのが悪いんじゃないか。おつむが軽薄なら荷物も軽くしろつてんだ」

「ほんつと、クチ悪いスねえ相変わらず。だいたいこんな天気の良い日に取材なんて、カメラ濡れたらどうするんスカあ」

「文句言いたきや相手に言いな。いろんなツテに頼つて、やつとこさゲットしたアポだ。こっちが病気だろうが、全身ブツブツができて痒くてたまんなかろうが――」

「うわっ、気色わりい」

「うるせえ、ホーダイ！ 明日世界が終わっちまおうが、行く時や行くのよ。それがマスコミ界の渡世人ってものだ」

19

「渡世人だなんて、タンクさん、フーテンの寅さん気取ってんスカ」

「そうよ。♪義理と人情に厚いこの俺が、弱きを助け強きをくじき、世の悪党どもを燻^{いぶ}り出し、マジメにコツコツ生きてる人たちに『ああ、生きてて良かったなあ』と言ってもらえる世の中を作る、そのために日々戦ってるんじゃないか」

「おいらはコツコツ金貯めて、いいレンズ買えればそれでいいス」

「まったくお前はいつも俺をブルーにさせるぜ——まあ、人情に厚いところでも見せてやるか。その抱えてるレンズケース貸してみな。上の荷台に乗つけてやるからよ」

相方は、取られそうなお菓子を隠すように、レンズケースをガバと抱きしめた。

「いいっス、いいっス。無理して乗せて落つことされでもしたら大変スから。こうやって膝の上に乗せとくっス」

「バカ、俺がそんなドジ踏むように見えるか？ ええい！ そんなら俺の席に置け」

「は？ そしたらタンクさん、立ってんの？」

「なんで俺が米沢まで立ちん棒なんだよ。新幹線の低い窓からじゃ田圃^{たんぼ}しか見えねえだろが」

「コツコツ生きてる人たちの生活が見えますよ」

「お前とはやってられんわ。どけどけ」

そう言って大男さんは通路に出てきた。そして迷うこ

となくタケルに話しかけてきた。

「やあ少年。君の横の席は空いてるかい？」

いきなり話しかけられ、タケルはドギマギした。

「はい——たぶん空いてます」

「そうかい。ありがとよ」と言うや、スルツと滑り込んでタケルと肩を並べた。相方が叫ぶ。

「タンクさーん。検札来たらどうするんスカー」

「そんなモン適当に言っとけ」そしてタケルの方を向いた。「うるさくてすまねーな、少年」

「いえ」知らない人と話すのは得意じゃないけど、この人は知らない気がしない。

「おじさんたちは記者ですか？」

「聞こえてたか。そうなんだ、人に会って話を聞いて、それを文章にまとめて記事にする。これが俺の仕事だ。名前は丹内九州男^{たんないくすお}、略してタンクって呼ばれてらあ。あいつは」と相方を指さし「カメラマンの口野正典^{くちのまさのり}、又の名をホーダイ、なんでかつつーと、大砲みたいな超望遠レンズをどんな時でも持ってくるからよ。いいか、室内で撮影する日でさえ持つてくるんだからヘンタイなんだ」

「違うつスー。チャンスを逃がしたくないだけスー」
ケースを撫でながらホーダイは反論した。

宇都宮を過ぎ、郡山を過ぎた頃には、タケルはタンクこと丹内氏の話術にすっかり引き込まれていた。タケルは名前を聞かれたが、なんとなく気が引けたので、母の名字を借りて「桜井タケル」と名乗り、「米沢の親戚に会いに行く」と話した。

タンクは仕事であった面白いエピソードなどを披露した。インタビューの時、相手によっては、怒らせて本音をしゃべらせる荒技があるという話には驚かされた。大人がわざと喧嘩を売るなんて。

「喧嘩じゃないよ。人間って本気で怒ったり、心から泣いてる時ってのは、嘘つかないからね」

じゃ、京都で乗り合わせたお婆さんのキレた理由は何だったんだろう？ タケルは話してみた。

「なるほどなー。ニコニコしてたのがいきなり豹変ってか——そりや多分こういうことだね」

タケルは身を乗り出した。

「お婆さんは愛想よく話しかけたから、君も同じように、にこやかに話に乗ってきてくれるだろうと期待してたんだな。ところが君は断った」

「うん」

「君としては丁寧に断ったつもりだったろうけど、お婆

さんの予想を裏切っちゃったんだね」

「うーん」

「人にはね、予想と違う結果が出ると、結果を出した方が、おかしい、間違ってると思い込む人がいるんだよ。あんまりな話だけどね。俺がインタビューしててもよくいるよ、そういう人。まあ、予想が外れていい気分の人なんていやしないか」

タケルは必死で理解しようと頭を働かせた。

「——じゃあ、タンクさんはいろんな人と会って話すのがお仕事だけど、相手が予想してなかった態度に出た時はどうするの？」

「それは、賢い大人だったらそんな時どう対応するのかって質問だな」

「あ、うーん、そうなのかな」

「ははは。なかなか鋭い質問をするね」とタンクは少し居住まいを正した。「その答えは——君のすぐ前にある！」と前方の宙を強く指さした。

「は……？」

「カカカカ、煙に巻いちまったかな。許しておくれ。32歳にもなって俺って悪^{ワル}よのー」

タケルはもう目を白黒させるしかなかった。でもどことなくタンクには誠実さが感じられた。決して悪い気はしない。

「予想外っちゃ、あいつなんか予想外の固まりだよ」見ると、ホーダイが座席に横になって眠っていた。大事なカメラケースは両足を乗せられて、今にも座席からズリ落ちそうだった。

21

ホーダイの足は絶妙なバランスで、落ちそうなカメラケースをкаろうじて支えている。

列車はまもなく米沢に到着しようとしていた。

「おいこら、起きろホーダイ」

タンクがホーダイの頭を叩いた。はた

「んああ、よく寝たあ」

「“寝たあ”じゃねえよ。早く起きねえと用のあるカメラだけでもらつてくぞ」

「だめっスよ。カメラがないと力が出ないよお」

「あんぱんマンか、てめえは」

車窓いっぱいにはホームが見える。駅の表示板には『米沢』とある。とうとう着いた。

三人はホームに降り立ち、改札へと向かい、並んで白亜の駅舎を出た。タンクはタケルに、一緒に昼飯でも食うかと誘ったが、タケルはお金が無かったので、そうとは言わず、ここから歩いてすぐの親戚ん家ちで用意してる

からと断った。

タンクはタケルに向かって手を差し出した。タケルはその手を握った。

「あんがとうタケル君。おかげで道中、退屈しなかったよ」そう言って握手の手に力を込めた。

「——ぼくも楽しかったです」

「またどこかで会おうや」

「はい」

タケルは二人に別れを告げ、駅を後にした。

「珍しいスよね、子供嫌いのタンクさんがずっと話し相手になっていたなんて」

「バカ、俺は利発な子供は好きなんだよ」

タケルの姿は角を曲がって見えなくなった。

「“桜井”なんて母方の名前を名乗るとこなんぞ、泣かせるじゃねえか」

「え？ タンクさん、あの子知ってるんスか？」

「大和武クンだよ」

「大和っていやあ……エッ、大和武彦の？」

「そうよ、一人息子さ——每晚資料と首っぴきだから見間違えようがねえよ。母親と一緒に今は関西に住んでる。いずれ折を見て取材にうかがおうと思ってたが、今日はいい顔つなぎになったぜ」

タンクは自分の鞆を背中に抱えた。

「さあ、昼飯食ったら、いよいよ敵さんの牙城に乗り込むぞ。お忙しい方だから時間通りに選挙事務所に到着しないと、アポを反古にされちまわ」

「おいら、武者震いするっス」

「いい加減その舎弟言葉やめろよな。頭も財布もスー風通しいいって言ってるようなもんだ」

「ひでえ……ス」

タケルは山手へ続く道をテクテク歩いていった。

22

博士の研究所は、タケルがもと住んでいた家の近くで、途中に昨年まで通っていた小学校があるから、まともに行けば、必然的に以前の通学路を歩くことになる。顔見知りに会う可能性がある。それは困る。多少遠回りだが裏道に行くことにした。タケルは改めて帽子のツバを引き下げた。

道のあちこちに大きな水たまりができている。

いま雨は止んでいるが、空を見上げるとまたいつ降り出すかわからない雲行きだ。なるべく早く博士^ちん家に到着したい。夏とはいえ、台風のせいで気温は低いので歩くには好都合だ。

タケルはさつきから非常に空腹だった。お金は使いたくなかったが、このままではスタミナが切れそうだ。なので、やむなくコンビニでスナックパン一袋とスポーツドリンクを買った。

裏道は田圃に面していた。懐かしい風景の間をタケルはパンをかじりながら歩き続けた。

——思い出せば、引越したのは今年の正月三が日の間だった。荷造りを祖父ちゃんのお教子さんに任せたら、アツという間に全部段ボールの中に収まっていた。空っぽになった家の中はまるで洞窟の中のように声がよく響いた。……その後、あの家には別の家族が住み着いたんだろうか。

やがて登り坂になり、林の中に入った。墓場が遠くに見える。たった半年では何も変わらない。

——なのにはくはこそこそしてる。人目を気にしてる。風景を懐かしむどころじゃない。いったい誰のせいでもないことになったんだろう……。

林を抜けると、桜ヶ丘団地に出た。タケルはメインストリートを避け、大きな池をぐるりとめぐる小道に降りて行った。ここを伝っていくとタケルの家の裏に出るのだ。

池を半周すると、地面が剥き出しむになっっている階段に出た。この辺一体を遊び場あそびにしている子供たちがその

足で削って作ったものだ。タケルもその一人だった。急勾配だが周囲の枝をつかみながら登ると、みごとなほどショートカットになる。

多少ぬかるんでいたが、タケルはひと息で登った。そこには懐かしい元^{もと}我が家が見えるはず……。

——なにこれ？

四角い巨大な箱がデンと鎮座していた。

いや違う、建物——店だ。タケルはその建物を見上げながら入口の方へと回り込んだ。自動ドアを何人もの人が出たり入ったりしている。出てくる人はビニール袋をかかえている。

スーパーマーケット！　なんてことだ、タケルの家はスーパーに建て替えられていたのだ。

看板を見ると『HATANO』と読めた。

23

『スーパー・ハタノ』？？？　「ハタノ」って、

あの「波多野」？

そうなのだろう。タケルの家があったのは元々、波多野家の土地だった。ローンは払い終えておらず、出ていく際に波多野家へ戻されたと聞いていた。ずっと前にうちの物じゃなくなっていたのだ。でもタケルにとって、

住み慣れた家がいとも簡単に消去されたことは無性に悔しくてならなかった。

気がつくと、入口の真正面に立ちつくしていた。主婦が、何この子、という顔でタケルの横を通り過ぎた。タケルは顔を見られないよう俯うつむいたままそこを離れた。それでも未練がましくスーパ―の敷地内にある駐車場に入ってみた。

家はなくなったが、塀際に沿うように植わっていた木々はそのまま活かされていた。その一本にタケルは近寄った。その木だけは他よりも低い。なぜなら――。

――父さん、ずいぶん成長したよ。

それはタケルが生まれたときに、父武彦が自ら植えたものだ。多忙な時間を割いて、ある日曜日、母とふたりで運び込み、植え込んだものだと言いたのを思い出した。

タケルは木の横に立ち、振り返った。ふと建物の脇に異質な建築物があるのに気づいた。プレハブの二階建てだ。

その時、プレハブの二階の引き戸がサツと開き、中から人が出てきた。タケルはアツと声を上げそうになった。タンクさんとホーダイさんだ。

ふたりは階段を下りると駐車場に入り、こちらへと

近づいてきた。タケルは声をかけようかと目でふたりを追っていたが、風に流れて聞こえてきたタンクの言葉に硬直した。

「大和武彦の――」

反射的に、タケルは木の陰に身を寄せた。ふたりはタケルのそばまでやってきた。そして目の前に駐車していた車のドアを開け、乗り込んだ。すぐ出発するかと思いきや、エンジンもかけずにそのまま話し込んでいるようだ。

タケルは屈^{かが}んで、ソロソロと近づいた。

「――やっこさん、予想以上のタヌキだったな。」

中央であれだけ逮捕者が出て、ここでも厳しい取り調べがあつたつてえのに、涼しい顔してやがる。あんまりニコニコとしらばつくれるもんだから、

ちよいと痛いトコ突いてやったじゃねえか。ところが見たか？ あいつ最後まで眉をピクリとも動かしやしねえ。罪をぜんぶ大和武彦におつ被^{かぶ}せやがって、ワタシは知らぬ存ぜぬの一点張りだ。選挙初出馬だつてのに、キモが据わってやがるぜ」

タケルは呼吸が詰まりそうになった。それでも背中を

車の後部ドアに貼り付けたまま、車内の声に耳をそばだてていた。

「ファインダ越しに見ててもそんな悪い人間には見えなかったスけどねえ」これはホーダイだ。

「刑事ドラマなら、絶対に犯人役には使えねえな、あの面ア。どっちかつつーと、息子を誘拐されて身代金要求される社長ってタイプだな」

「選挙ポスターに印刷されてるまんま、スもんね」

「まったく想像できねえぜ——。あのスマイルで地元出身の代議士を踊らせて、関係省庁の役人どもをその気にさせ、おのれの銀行の金を豪快に動かしたんだからな」

「そいじゃ、大和武彦は無実なんスカ？」

タケルは緊張が最高潮に達した。

「さあてそこがハッキリしねえ——。写真を見る限りじゃこちらにも実直そうな顔してるがな。ただいかんせん二枚目だった。マスコミが喜んで飛びついたのもわからんでもないわな」

『そんなことはない！ 父さんは無実だ！』タケルは立ち上がって声高らかに叫んでやりたかった。しかし、そのときエンジンがかけられたので機を逸した。

「まあ今日のところはこれぐらいにしよう」

タンクは吐き捨てるように言うつと、慣れないレンタカーのせいだろう、上手いとはいえないハンドルさばき

で駐車場を出ていった。

タケルはしゃがんだまま、駐車場のアスファルトをしばらく見つめていた。

父が亡くなってから、タケルは事件のことを考えたことがなかった。避けていた。もともと詳しいことは何一つ教えられていなかった。祖父も祖母も日常生活の中でその話題には一切触れなかったし、タケルも訊かなかった。ニュースも新聞もちろん見なかった。警察署で最後に父と面会した日に「潔白」であることを確信したから、タケルの中ではそれで解決していたのだ。真犯人は誰かなんてどうでもいい。そんなことがわかってても父は帰ってこない。母だって元には戻らない。

——でも今、タンクの話聞いてしまったタケルの心は激しく動揺していた。真犯人の存在というのが血肉を持って、頭の中にむくむくと湧いてきたのだ。

改めてタケルはプレハブ建築を見上げた。何枚もの選挙ポスターが貼られていた。写っている顔はよく知っている。これが真犯人だというのはか。「波多野守」が。波多野のおじさんが——。

駅から歩き通しで、蓄積した疲れがタケルの足を棒のようにしていた。それでも足を選挙事務所に近づけないではいられなかった。

——『波多野さんは偉いよ。まだまだ学ぶ点が多い』と父さんは言ってた。

——波多野さんはぼくの前で『父さんがいなかったら私は何もできない』と言ってた。

——波多野さんが父さんを騙した^{だま}？

タケルは少しずつ怒りがこみ上げてくるのを感じた。階段の下まで来た。あの二階にいま波多野さんがいるんだ。行って問いつめてやろうか！

その時、大きな声が近づいてくるのに気づいた。拡声器を使った声のようだ。やがて声の発信源である車が駐車場に入ってきた。

「はたの守、はたの守をよろしくお願いします」

外宣カーだ。それが駐車場をぐるっと回って事務所の方に近づいてきた。まるでタケルに襲いかかろうとするかのように。タケルはあわてて周囲を見渡し、階段裏に積んであったビールケースの陰に飛び込んだ。

頭上の引き戸が開く音がして、何人か降りてくる足音がした。タケルは首をすくめた。外宣カーからは五、六人の男女が降りてきて、階段の両脇に整列した。みんな白い手袋をはめている。そして降りてきた人物を迎える

ように、彼らはその手で、拍手し始めた。ということは一。

「先生、ご苦労様です」

「先生、よろしく願います」

白手袋の声に応えるように右手を挙げた後ろ姿は、まぎれもない波多野守その人である。

「それじゃあ頼むよ」

彼はそう言つて車に乗り込んだ。後部座席に座ると、やはり白手袋をはめようとしている。その姿をタケルの眼は捉えた。少し太ったようで、以前にも増して貫禄が付いている。眼鏡の奥の眼が鋭く光った。あんな眼をする人だったのか――。

「いつてらっしゃいませ」

見送りの声とともに外宣カーは発進した。駐車場から出るや再び「よろしく」が始まった。

タケルはしばらく待ち、事務所の人間たちがその場からいなくなったのを確認してから出てきた。

――ぼくの家が消えて、波多野おじさんのスーパーができた。父さんが亡くなって、おじさんは太った。あの時マスコミは父さんをいじめて、おじさんを偉いと言った。タケルは辞書を引いて知っている。こういうのを理不尽というんだ。

――みんな嫌いだ。マスコミも嫌いだ。この世界は敵

でいっばいだ。

26

でも——とタケルは思う。『スーパーハタノ』を離れ、再び、池沿いの道に降りてきた。誰もいない所で水面を見ながらスポーツドリンクを一口飲むと、ちよつとだけ冷静になることができた。

——でも、どういふことなんだろう。父を叩いたマスコミが、今度は波多野おじさんが悪いという。父さんは濡れ衣を着せられたという。父さんは心労がたたつて……それじゃあ……。

——それじゃ父さんは殺されたようなもんじゃないか！ 殺された……。

タケルの体はガタガタと震えていた。ひとりでこんな所にいるのが急に怖くなったのだ。

水滴が池の水面に小さな波紋を描き始めた。雨が降り始めたのだ。風も強くなってきた。視線を上げると、早くも遠景が煙り始めている。

タケルはリュックからレインコートを取り出して着た。今朝かぶった雨の湿り気が残っていた。

とにかく今は、博士のところに行かないと。

——マスコミは悪だと今でも信じてる。でもタンクさんたちは別のようだ。少なくとも父さんの事件がおかしいと感じて取材に来ているんだ。今度会ったらもつといろいろ聞いてみたい。

タケルは池沿いの道を別方向に歩いた。十分ばかり歩いたろうか。頃合いだと思つて道のない斜面を登った。濡れた草で何度か滑ったがようやく上までたどり着くと、そこはピタリ、博士の研究所の裏庭だった。

ちゃんとあつた。タケルは泣きそうになった。もしこの研究所まで消えてしまつてたらどうしようかと道々不安だつたのだ。

さらに近づいた。研究所の裏口が見える。ふとタケルは首を傾げた。窓ガラスが何枚か割れている。いくら博士が奇人とはいえ、そういうところは神経質で、すぐに換えるはずだ。ほとんどが磨^すりガラスなので中を覗き見ることはできない。

タケルはさらに歩を進め、裏口のドアに到着した。足下でジャリツという音がした。かがんで見るとガラスの破片。ということはドアのガラスは内側から割れた……？

タケルの背丈ではそこから中を覗くことはできない。ドアの回転ノブに手を掛けて、グルツと回し、手前に引いてみた。ドアは開いた。

なんとなく尋常ではない雰囲気を感じていたので、声を出さずに、中に首だけ突っ込んだ。耳をそばだてる。物音ひとつしない。ただ雨音と、どこかの割れた窓から吹き込む風がピューツと笛のように鳴っているだけだ。

27

妙なニオイがタケルの鼻をくすぐった。そこはキッチンだった。タケルは靴を脱いで上がってみた。テーブルには食べ物のカスが散乱していた。インスタント物やお菓子ばかり食べ散らかされている。ドリンクのボトルも何本か飲み捨てられている。それらから立ち昇る臭気だったのだ。

食器はほとんどが床に落ちて割れている。博士は自炊する人だが、鍋やフライパン、炊飯器などもひっくり返っている。包丁はなんとダーツのように壁に突き立っていた。

足の裏がザラツとした。床は泥まみれだった。しかたがないのでタケルは戻って靴を履き、ごめんなさいと^{つぶや}きながら上がり直した。

博士の研究所は今どき珍しい平屋だ。何度も遊びに來ていたタケルは当然すべての間取りが頭に入っている。タケルは順番に部屋を巡った。メインの研究室は破壊の

限りを尽くされており、資料ファイルは棚ごと引き倒されていた。コンピュータは丸ごと無くなっている。図書室も散乱した本のせいで床が見えず、入ることすらできなかった。風呂にも洗面所にも博士の姿はなかった。猿などの動物たちは檻おりごと消えていた。

これは猿たちのやったことだろうか？ 博士の飼っていた猿たちが檻から逃げ出して……。しかし猿の仕業にしてはひどすぎる。

この家には二階がない代わりに地下室がある。その入口は――。

ヴヴヴヴヴ……。携帯のバイヴが鳴った。ズボンの尻ポケットから取り出して表示を見ると、『祖父ちゃん』と出ていた。

「もしもし」

『おお、タ、タケル！ ゴホゴホッ』

「祖父ちゃん、落ち着いて」

『用事を早よ済まして帰ってきたわい――今し方な、新出博士から電話がかかってきたんや』

「そうなの？ 今どこに――」

『わしの話を聞きなさい。博士が言うに、前回の電話でちゃんと通じたかどうか心配やったて言わはるんじや。何のことやあて訊いたら、『研究所には近づくな』じやと』

近づくな……？

『博士には、タケルはそろそろお宅に到着する頃ですよ
て言うたんや。そしたら《イカン！》ちゅうて、あわて
て電話切られてしもたんや』

イカン……？

雷に打たれたようにタケルは突然悟った。あの日、博士の携帯から聞こえた耳慣れない乱暴な声。ガラスの割れる音！

28

——博士はここで何者かに襲われた！　そうに違いない。あの電話に出た奴らが、博士の家の中をめっちゃめちゃにしたんだ。まるで突然宇宙からやってきた悪者の異星人のように……。

ブオン、と音がした。玄関の方角からだ。オートバイの音に似ている。何度も空吹きをしている。UFOか？　異星人が帰ってきたのか？

「——つてもいいんじゃないか、そろそろ」

「まだだツつってるだろーが」

奴らはひとりじゃないらしい。やがて音が静まり、扉が開いた。ドヤドヤと入ってくる。

——博士は「研究所に近づくな」と言った。

——博士は、イカン！　と言った。

いかん！　異星人たちは玄関に上がり込んで、廊下をこちらへ向かってくる。武器のないタケルには応戦しようがない。タケルは裏口から逃げようと体の向きを変えた。しかし間に合いそうにない。奴らの足音がすぐそばまで迫っている。タケルはタッチの差で、迷彩スプレーで落書きを施された冷蔵庫の裏に逃げ込んだ。

「パソコンってのはな、すっかり中身を消しとかないと足がつくんだよ」異星人Aが面倒くさそうに吐き捨てた。彼がボス格なのか。「だから売り飛ばすのは、その後よ」

「でもよお。今月ガス代キツイんだよお。早いとこぜ二が欲しいんだよお」これは異星人B。

「マアあのMacは一世代前の機種ですし、あんまり期待しないほうがよろしくてよ」

最後の発言者の口調は少し気持ち悪いが、明らかに男の声だった。こいつは異星人Cだ。

「そんな話より、メシにしようぜ」Aは言った。

タケルは冷蔵庫の横からチラリと覗き見た。彼らはテーブルの上に散らかっていたゴミを床に払い落とした。そして、テーブルにどつかと足を乗せ、買ってきたホカ弁を開いている。

「冷蔵庫からビール出せよ」とこれはAだ。身長は一八

○ぐらいだろうか。髪をオールバックにした眼光の鋭いスリムな男だ。

「あいよ」とはBだ。Aより首ひとつ小さいが、猫背で、しまりのない顔つきをしている。

「アタイのもお願いね」とこれは……Cらしいが言葉遣いと落差が大きすぎる。見た目はモロにボブ・サップだ。

彼らはみな、黒のバイクスーツを着ている。年齢は顔付きからして意外と若い。

「しかしいいアジトができたぜ」とA。その声にタケルは聞き覚えがあった。あの夜、携帯の向こうで「バーカ」と言った声だ。

29

——こういう時って、物音を立てたりして敵に発見されるのがドラマによくあるパターンだ。だからあまり動き回らず、じっとしてなきや。

タケルはドキドキしながらも、ワクワクしている自分に気づいていた。

「ホント、周囲が林に囲まれて、他の家からも離れてるから人目を気にしないでいいものね」

「でもよお、ちつとばかり薄気味悪くねえかあ」とBが

冷蔵庫からビールを取り出しつつ、外の気配を伺っている。「オレ、ひとりでここにいるのだけはご免だぜえ。何か出てきそうだあ」

「あの白衣の野郎を早く捕まえるこつたな」

博士のことを言ってるらしい。異星人の虜とりこにはならなかったようだ。

「うまく始末すりゃ大手を振って、ここに俺たちバッド・エイリアンズの旗を立てられらあ」Aは傲然と言いつけてタバコに火をつけた。

——なんて奴らだ。こいつら博士を……。

その時、ガーッと大きな音がタケルの鼻先で鳴り響いた。冷蔵庫のコンプレッサーだ。「ひっ」とタケルはのけぞった。

「なんだ!」「誰だ!」

しまった! 自分のドジさに舌打ちしつつ、逃げようと体を動かした。しかし異星人らのほうが素早かった。冷蔵庫の両側からBとCがタケルをはさみ撃ちにした。

「あらまー、これはまた可愛いお坊ちゃん!」とCの言葉が舐なめるようにタケルの上に降り注ぐ。じっさいCの眼はタケルの姿を舐めるように上下している。

「ちよつとタイプよ、このコ」とCが迫る。

「おい、明るい所に連れてこいよ」とA。

「オツケー」とBがタケルを羽交い締めになると、Aの

前に引き出した。

外はかなり暗くなっていた。Aは壁のスイッチを入れ、天井の明かりを灯した。

「これはこれは、小さな侵入者だな」とA。

どっちが侵入者だ！

「ひよつとしてえ、我がバッド・エイリアンズに入りたいのかなあ？」とB。

「まあ待てよ」とAはタケルに話しかけてきた。「お前、こんなトコで何してる？」

タケルは無言でAを睨みつけた。

「名前は何ていうんだ？」

これにも答えなかった。

「だんまりかよ。可愛くねえな、こいつ」

「いいえ、アタイこのコのハンサムなお顔、知っててよ。

——ヤマトくんでしょ？」

30

タケルは自分の名前を言い当てられてギクツとした。

——ぼくなんかの名前を……。

「どうして知ってんだよお、サユリい」

「アタイはね、一度見た美形は忘れっこないの」

サユリは得意げに腰を振って微笑んだ。

「おい小僧、安心しな。そいつはオカマ言葉しゃべってるが、真正正銘の男だからよ」とボス格。

「よけい心配だっちゅうの！」と猫背の男。

「こら、ムネオ！ 失礼しちゃうわね！」サユリは巨体を揺すりながら指をボキボキ鳴らした。

「やめろ」とボス格が口をはさんだ。「こいつの名前が“ヤマト” ってのは間違いないんだな？」

「もちろんよ。しかもあなたもよく知ってる」

「なんだと？」

「フルネームは “大和武”。キョウスケのお父上の元部下のひとり息子よ」

「な、なににい!？」ボス格が叫んだ。

これにはタケルも驚いた。このボスがタケルの父武彦の――上司の――息子だという。キョウスケと呼ばれた彼も少なからず動揺しているらしい。

「――て、て、てことは、あのダム汚職の犯人の息子か？」

その言葉にタケルは反応した。

「違う！ 父さんは犯人じゃない！」

叫びながら暴れたが、タケルの力では羽交い締めになっているムネオの腕はビクともしなかった。

「ほおくらね」サユリはフンと鼻を鳴らした。

「――そうかあ、お前がああ事件のねえ」とキョウスケ

はタケルに顔を近づけた。

「俺もお前の親父の面ア、よつく覚えてるぜ。なんせ犯人のくせに、毎日テレビに映ってたからなあ」彼は中腰になってタケルの頬を突いた。「確かによく似てらあ」

「このコも自分家の前でチラツと映っただけでしただけ、アタイの眼は見逃さなかったわ」

キヨウスケはおもむろに立ち上がり、タバコの煙を天井に向けて吐き出した。

「その息子が何だってココにいるんだ？」

「そうよね、住んでた家をキヨウスケのお父上に奪われて、確か遠くに引っ越したんだものね」

「奪われて、って聞き捨てならねえな。あそこは元々ウチの土地だ」

ウチの土地？

「あらこのコ驚いてるみたいね。そうよー、彼の名前は波多野京介、今や県議会議員候補、波多野守の末っ子よ」

言われてみれば、長い顔など瓜二つだ。

外はますます暗く、雨は激しさを増していた。

「なあお前ほんとに、ココで何してた？」キヨウスケは

重ねて質問を浴びせてきた。タケルは何も答えず、ひたすらキョウスケの視線を真つ向から跳ね返していた。

「なあよお」後ろのムネオが声を上げた。「オレこうやってんの疲れてきたぜえ。メシもまだ途中じゃねえかよお。コイツ尋問すんの、後にしようぜえ」

「ふーん、それもそうだな。ビールの気が抜けちまう——それじゃ、どこかに閉じ込めておけよ」

そう言つてキョウスケとサユリが適当な場所を見つころうため後ろ向きになったとき、気が緩んだのか、ムネオの腕が下がった。

タケルは期を逃さず、右肘を振り上げた。

「ゲフツ」

肘が見事にムネオの顎をヒットした。縛めがはずれたタケルは、そのまま床にかがみ込むとテーブルの下に逃げ込んだ。

「こ——のクソガキ!!」ムネオが吠えた。

タケルはそのまま裏口から飛び出そうと思ったが、キョウスケがいち早くそちらに回り込もうとしていた。サユリは反対側からテーブルに潜り込んできた。しかし大きな図体が邪魔している。

タケルは空いている前方に転がった。体育の時間にやったマツト運動の要領だ。回転する足がうまく椅子に当たって、戻って来ようとするキョウスケの腹にぶつか

り、ウウと呻くのが聞こえた。

タケルは走った。廊下を玄関の方向へ駆けた。

しかし唐突に足がもつれた。何か足に絡まったのだ。勢いがついたままタケルは前に倒れ、額をゴンと床に打ち付けてしまった。手を当てるとわずかに血が出ていた。なんとか起きあがろうとするが、左肘もすりむいていて痛い。恐ろしさに眼を後ろにやると、サユリが投げたのだろう、ヘルメットを拾い上げようとしていた。

「あらら、ごめんなさいねー。乱暴しちゃって。血が出てるわ」と笑いながら近寄ってくる。そのサデイスティックな顔はタケルをすくませるのに十分だった。

「さあ、こっちにおいで。お兄さんがかわいがってあげるからっ。ん〜」

サユリが覆い被さるようにタケルに手を差し伸べた、その時だった。

ズズーン。

家全体が揺れた。天井から埃が落ちてきた。

ズズーン。

まただ。地震か？ タケルもサユリたちも壁に手をついて周囲を見回した。すると次の瞬間、身も凍るような怪鳥音の家全体に響き渡った。

ギャギャギャギャーッ。

不気味といえばこれほど不気味な声を、かつて聞いたことがない。不気味というだけでは言い足りない。醜悪であり不快であり嫌悪感を感じさせる。タケルはブルース・リーが口から血を滴らせ、^{わら}嗤いながら登場するシーンを想像してしまい、背筋がゾクゾクツとした。

頭上からも、地の底からも湧き出てくる声にタケルは耳を塞いだ。眼の端っこでムネオが「ひえひえ」と口走って腰を抜かす様が見えた。

ズズーン。ズズーン。

断続的な揺れが恐怖を倍加させる。映画『ジュラシック・パーク』でTレックスが最初に登場するシーンと同じだ。車の中に置かれたコップの水面が、ズズーンという音のたびに波紋を広げていたのを思い出す。

その雰囲気^{あお}を煽るかのように、今度は電灯が点滅を始めた。

「何なんだよお、これよお!!」

「つるせえ!!」わめき声が震えている。

ギャーッという不気味な声がサラウンドで響く中、さらに今度は羽ばたくような音が混じってきた。しかも、それは音だけでなく実体を伴っていた。どこから現れたか、おびただしい数のコウモリが宙を飛び交い、鳴き始

めたのだ。

こうなつては超弩級のお化け屋敷に閉じ込められたようなものだ。風雨に晒^{さら}されて揺れる家。明滅を繰り返す明かり、不気味な声、コウモリ。十重二十重の恐怖にタケルも三人組もパニックに陥った。ただ悲鳴を上げて逃げまどうばかりだ。

そしてついにとどめの一撃が振り下ろされた。テーブルがひっくり返り、怪獣が現れたのだ。全身黒い羽毛に包まれたカラスの親玉だ。こうなつては三人組も泣いてるのか笑ってるのか分からない。ヘラヘラとわけの分からないことを口走りながら這うように逃げ出した。タケルの脇をすり抜けて、玄関から表に飛び出していく。

「た、た、助けてくれ〜」

「ひえひえ」ムネオなど顔面汗まみれ涙まみれの鼻水まみれだ。おそらくバイクは置きっぱなしにされたことだろう。

タケルも後を追って逃げようとしたが、怪獣に足を掴^{つか}まれてしまった。もうだめだ。食われる。そう思ったとき、

「おい、タケル、ワシだ」

人間の声がした。振り向くと、飛び交うコウモリを背景に、怪獣が新出博士の顔をして立っていた。

「博士ーっ」

タケルは抱きついた。博士も羽根を広げてタケルを抱きすくめた。タケルの体が羽毛の着ぐるみにすっぽりと埋もれてしまった。

「久しぶりだなあ、タケル、はっはっは」

ふたりの周囲ではコウモリが飛び続け、不気味な音も鳴り続けている。

「さあ、一刻の猶予もならん。逃げるぞ」

「はいっ」

博士はテーブルをどけた。そこにはぽっかりと穴が開いていた。地下室へ降りる入口だ。なぜこんなところにあるのか理解に苦しむが、地下への階段が続いている。

タケルが先に降り、博士は後から蓋を閉めて降りてきた。騒音がピタリと聞こえなくなった。

降りきると、そこには白壁に囲まれた十畳ほどの空間があった。少々カビくさい。タケルは以前、博士の荷物整理を手伝ったときに一度だけここに入ったことがある。段ボール箱がいくつかとアングルで組んだ棚、自転車などが置いてあるだけだ。

「博士はずっとここに隠れてたの」

「ははは、まさかな。トイレもないここじゃ無理だ」話

しながら博士はカラスの着ぐるみを脱いで、クローゼツトに掛けた。そこには他に何着もの着ぐるみが整然と掛けられていた。

「奴ら、すぐには戻って来ないだろうが、仲間を連れてきたら見つからんとも限らん」

「あいつら何者なんですか？」

「暴走族の真似事しとる、ただの高校生だよ」

「高校生なの!？」

小学生のタケルは、やたら大人びて見えたが。

博士は必要なものをリュックに詰めながら言葉が続けた。「一昨日^{おとつ}だった。夜、突然あいつらがやって来た。

何の用だと訊ねても一向にわしなぞ目に入らない様子だった。そして『いい場所だ』なぞと言いつつ、持ってきた鉄パイプを振り回し始めたんだ。手下がわしを捕まえようとしたが、間一髪、この地下室へ逃れたんだ。

もつとも以前から兆候はあった。使いつぱしりみたいなのがちよくちよくこの辺りをウロウロしとったんでな。危険を感じて動物たちは他に移しておいた。それでも一昨日の襲撃は予測しとらんかったよ。あわてとつたので財布しか身につけておらず、携帯電話は置き忘れてしまった」

タケルは、電話に連中が出たことを話した。

「そうか、それで心配してわざわざ来てくれたのか。――

「済まんかったな」

博士は心からうれしそうにタケルの顔を見た。

34

「準備が済み次第、出発するから、もう少し待っていてくれな」博士はそう言うと、棚からロープや小型スコップなどを降ろし、小さくまとめる作業を始めた。タケルは背負ったままだったリュックからスポーツドリンクを取り出して飲んだ。さいわい、ドリンクもパンも潰れていなかった。

「出発って、どこ行くんですか？」

「うん、わしがいま使ってる隠れ家だ。ちよつと歩くぞ」

「遠いんですか」

「小一時間はかかろうな」

タケルは疲れ切っていたが、口に出さなかった。なぜなら博士も元気な声に反して、かなりやつれて見えたから。

「あいつらに発見される恐れがあるんで、表の道は歩けん。裏道に行くから足元に気をつけてな」

「敵は三人だけじゃないんですね」

「うむ、手下が大勢いる。そいつらが町中を網の目のよ

うに見張って、わしを探しておったんだ。素手なら三人や四人など物の数じゃないが、あいつら武器を持つとるし加減を知らんから怖い。警察に助けを求めたところで『証拠がない』と突っぱねられるのがオチだ。それに――

「それに？」

博士は手を休めてため息をついた。

「上にいた三人の中に猫背がおったろう？」

「ぼくを羽交い締めにした――」

「そいつはこの警察署長の息子だ。風采の上がらんとこまでそっくりのな」

タケルは絶句した。それじゃ犬猿の仲の署長が博士を助けるなんて、絶対あり得ない!!

「署長が息子の所業を知ってるかどうかは知らんが、ヘタすりゃ警察からあいつらに“通報”されてしまうわ。……はあ、どうなっとなのかね、この町は」またひとつため息をつく、博士はどっこいせと立ち上がり、隅っこの机の上にある何かのスイッチをオフにした。

「それは？」

「上の大騒ぎのスイッチを切ったんだ。あいつらを一泡吹かせてやろうと、前々から用意してたんだが、タケルを助けるのに役立って良かったよ。小型地震発生装置、家の各所に設置したスピーカー、それに山で捕まえてき

たコウモリたちだ。動物を使うのは気が引けたが、場合
が場合だけにな。おかげでわしの着ぐるみもバレんかつ
たわ。はっはっはー」

豪快に笑うと、キャスター付きの書棚を動かした。そ
の向こうの壁に新たな扉が出現した。

35

鋼鉄製の重々しい扉だ。映画で観た潜水艦の中の扉に
似ている

「ここ数日は、ここから出入りしとったんだ。ほとんど
使ったことがなくてな。外側が錆びさついたので力が要い
る」

博士は大きな取っ手をエイツという掛け声とともに回
した。そして体重をかけて押した。ゴゴゴという軋きしみ音
がして扉は開いた。

「うわあ」

タケルが喚声をあげたのは、外の風景に対してだった。
太陽のわずかな残光に照らされて見えたのは、暴風雨に
激しくなぶられる木々、そして大きく波立つ池。台風が
本格的に接近していることを如実に物語っていた。

「半端じゃないな！ これは！」

博士が怒鳴った。外の空気に触れたとたん、気圧の変

化でふたりの耳は聞こえにくくなった。

「グズグズしとれん、タケル行くぞ！」

「はいっ」

ふたりは着込んだレインコートを吹き飛ばされないよう、しっかりと両手で押さえながら外に出た。そこは池をめぐる道をちよつと外れた場所で、出入口は斜面の中腹に穿^{うが}たれていた。

目を開けているのがツライ。博士とタケルは協力して重たい扉を閉めた。博士はタケルに手招きしながら林の中へと入っていった。タケルも遅れじと後を追った。

陽が暮れると、月明かりもない山の中を歩くのは困難を極めた。枝に足を引っかけて転けたり、濡れた草むらに足を取られて数メートルも斜面を滑り落ちたりで、ふたりは全身泥まみれになり、ずぶ濡れになった。それでも博士は要所要所の枝に目印をくくりつけてあったらしく、懐中電灯を片手に迷わず進み続けた。目的地の山小屋に到着した時には、出発から二時間が経過していた。

それはずいぶん昔に見捨てられた小さなログハウスだった。ふたりは中に転がり込むと、疲労と安心感から床に大の字になって、しばらく立ち上がれなかった。やがて博士はむつくりと起きあがり、達磨^{だるま}ストーブに薪をくべて火を入れた。

「あとで風呂を入れてやるから、ひとまずここで濡れた体を乾かすといい」

タケルは言われるままに服を脱いだ。靴の中もぐしよぐしよだった。大事な本はしつかり梱包してあったので無事だった。

ようやく落ち着いて小屋の中を見回すと、檻に入った動物たちが隣室にいるのを発見した。

36

このログハウスは台風にも地震にもビクともせんと博士は断言した。見捨てられてかなりの年月が経っていたのを発見し、博士自ら、密かに補修したのだという。こんな悪天候の日に居ることになるうとは思わなんだが、どうだ隙間風も入って来んだろうと博士は自慢げに髭を撫でた。

それでも外のゴーツという風音は間断なく響いてくる。動物たちも怯えている。後で久しぶりに餌をやろう。タケルの体は半乾きだったが悪寒が取れたので、新しいTシャツに着替えて、博士の手伝いをしに表に出た。

窓はすべて表側から板が打ち付けられていた。台風の進路予測を聞いて、昼間のうちにやってしまったという。タケルは博士が転がしてきたドラム缶を玄関口から運び

込むのを手伝った。

「五右衛門風呂は、タケルも知らんだろう」

じつは博士は温泉大好き人間だ。山形には温泉が多く、秘湯も少なくない。昨年の夏には博士が発見した秘湯に連れていってもらったりもした。博士は温泉の効用が好きなのか、発見するのが好きなのか、以前尋ねてみたことがある。すると「単に体がほつかほつするのが好きなかだけだ」との返事だった。そんなわけで自宅にいるときも風呂は欠かさない。この日も片方の開いたドラム缶を無理して運んでまで湯船に浸かりたかったのは、そんな理由からだ。

もちろんタケルに否やはない。

ふたりは交代で即席の五右衛門風呂に入った。ドラム缶の底の足元に敷く簀の子や、体が直接熱い部分に着かないように入れた板壁も、博士はアツという間に拵こしらえてタケルを驚かせた。

ログハウスの玄関は吹き抜けになっているため、湯気は部屋に充満することはなかった。タケルは疲れと心地よさに、湯の中でうたた寝した。

「のぼせるぞー」

博士の声でタケルは目が覚めた。しかし少しでも眠れたおかげで疲れがふつとんだ気がした。

食事は質素だった。タケルが研究所に来る途中で買っ

たスナックパンしかなかったからだ。それをタケルと博士は半分こにした。天気がよければ近くに美味しい木の実があつたんだがと博士は残念がった。タケルが今日までのことを訊ねると、

「ほとんど山の中におったよ。あいつらは異様に熱心にわしを探しとるからな。タケルの祖父ちゃんに電話したときも、やつとスキをついた形だった。それでも途中で見つかつて追いかけられたがね。やつらはわしが山に隠れとることは薄々気づいとるようだ。追っつけここにもやって来よう」

37

隣室のチンパンジーの一匹がキイと鳴いた。彼らにはさつき、博士がかりうじて取っておいた、なけなしのバナナを与えた。鳥たちには専用の餌をやった。

祖父ちゃんに連絡しとこう。そう思つて携帯をかけようとしたところ、圏外だった。あるとき、研究所に三人組が入ってきたとき、あわてて切ったままだから、間違ひなく心配してるだろう。祖母ちゃんも。母さんは――。

博士は小型ラジオを持ってきた。NHKのニュースは、山形に暴風警報が発令されたと言い、明日は風速

も降雨量もさらに増すだろうと告げた。

タケルと博士はそれぞれ寝袋に入ったものの寝付けなかった。とくにタケルは五右衛門風呂の中でうたた寝してしまったので、目が冴えていた。タケルはチンパンジーに餌をやったときから、話そうと考えていたことを切り出した。

「博士、前に話した夢の話、覚えてますか？」

「んー？ ……猿人になった夢か？」

「うん——あれからまた続きを見たんです」

「ほお」と博士は寝袋から半身を浮かせた。「それは珍しいことだな。確か前の話では、大きな地震に遭って、小猿を助けて、それでタケル自身も猿人だったということだったな」

そこでタケルは続きを話した。

いきなり戦争の真っ直中からスタートしたこと。敵の猿人は茶褐色のブラウン族、自分たちはベージュ族。猿人タケルは体力的に敵側と遜色がなく、近づく敵をどんどん投げ飛ばした。しかし父親が倒れていた。かばうように姉がいた。自分は手頃な棒きれを拾って、これを振り回して敵を撃退した。それまで敵も味方も四足歩行だったのに自分は二本足で立ち、人類史上初めて武器を使った。

「ほう、どうして初めてと分かる？」

「んー、なんとなくそう感じたんです」

そのあと、傷ついた父親を助けて帰宅する途中でまた大きな地震が起こったこと。地震は至る所で地崩れや地割れを起こし、貴重な食料源である木の実のなる森を飲み込んでしまったこと。それがブラウン族との餌場争いの元になっていること。

「うーむ、夢にしては話が一貫しとるなあ。前にそんな映画か小説を読んだことがあるかね？」

「いいえ、全然」

「ふむ……」

そして丘の上から見た“溝の帯”は、その幅も深さも以前にも増して――。

「なんじゃと!? いま何と言った!？」

博士はバネ仕掛けのように勢いよく飛び起きた。

38

博士の顔は別人のようだった。

「ああ、すまん……知っててもおかしくないな」

「何を？」

「うむ」博士は寝袋から這い出した。「地溝帯について、本で読んだのかい？」

「チコウタイ？」

「——聞いたことないのか？」

「うん」

「そうか——断層というのは知ってるな。地震で地面が大きくズレた所だ。この断層のとてつもなく大きいのが地溝帯だ。日本にもいっぱいある。たいがいナントカ地溝帯と名前が付いておる。

さてわしらのような霊長類に関わる者にとって一番有名な地溝帯ってのは一般的に“大地溝帯”と呼ばれておる」

「ダイチコウタイ？」

「そうだ。それはな、アフリカの東側にあるんだよ。地面をザクリと南北に切り裂いたようにな。そしてそこは『人類の発祥の地』とされておる」

「えっ」現実世界の壮大な話にタケルは驚いた。

「さまざまな説はあるが、数百万年前に大きな地殻変動すなわち地震でもって、この大地溝帯が生まれた。そこには以前から猿人たちが住んでいたらしいが、大地の変動は彼らの住む環境を変えた。地面が盛り上がって山となり気候が変わって、ジャングルだった場所が乾燥して木もあまり生えないサバンナになってしまった。だから猿人たちは木の上から地上に降りて生活するようになり、二本足歩行になったという。猿人から人類へ進化した。それがアフリカの大地溝帯なんだ。

タケルがさつき言った“溝の帯”とはこの大地溝帯のことで、タケルは知ってて言ったんじゃないかと思ってるね」

そんなこと知るはずがない。昨日図書館で借りた『地球の歴史』も写真や絵しか見てないのに。

タケルは、博士の真剣そのものの顔を見て怖くなってきた。たかが夢の話じゃないの？

「だって、姉さんはぼくを“溝の帯”の奥深くに連れて行ったんだよ!! そしたら大きな岩に塞がれた穴があって、自分たちベージュ族はその穴の向こうにある地底の世界からやってきたんだって!! ぼくらは平和に暮らしてたのに、地震で天井が崩れてきて、みんな地上へ必死で登ったけど助かったのはひと握りで、本当の母さんは死んで、帰ってきたらブラウン族が全面戦争を仕掛けてきて——!!」タケルは、どうつと床に倒れた。

「タケル！」近寄ってタケルを抱き起こした博士はハツとした。ひどい熱だった。